

おひとりさまの終活

# 孤立死しない 自立死めざせ

## 孤立死の生き様 部屋からわかる

「単身世帯が増えている今、誰にも看取られずに一人で死ぬのはよくあること。死んでもなかなか気づいてもらえない生活をしていることが問題なんです」

遺品整理専門会社・キーパーズ社長の吉田太一さんはこう話す。11年前に創業し、年間1500件の依頼を受けるが、うち2〜3割は死後しばらく経ってから発見されるケースだという。「孤立死は高齢者というイメージですが、65歳以上になると行政の介護対象になり、人知れず死んで、何カ月も発見されないケースはそれほど多くない。むしろそこから漏れている50〜65歳の働き盛りの年代、とくに男性が多いんです」

仕事だけを生きがいにしてきた人は、リストラや定年などで仕事を失うとどうしていいかわからなくなる。友達も少なく、仕事以外の話題を見つけるのが苦手。プライドが高いので困っているも周囲に「さびしい」「助けて」と言えない。

「部屋を見ると、孤立死に至った生き様が想像できるんです」と吉田さんは言う。ゴミや服が

単身世帯が増える今、一人で死ぬことはめずらしくない。  
迷惑を最小限に抑え、一人で満足しながら息を引き取る。  
おひとりさまなりの幕引きを考える。

ライター 熊谷わこ 写真部 岡田晃奈

Asahi Shimbun Weekly AERA 2014.1.27 22

散らかり、壊れた家電や切れた電球はそのまま、布団は敷きっぱなし。そんなところに人を呼ぶないのでさらに片づけなくなる――。悪循環の中で人間関係が煩わしくなり、社会とのつながりが途切れる。周囲から関心を持たれず、死後、異臭や虫の発生でようやく発見される。「孤独死の作法」の著者で葬儀相談員の市川愛さんは、単身者から「亡くなった後、迷惑をかけるために」と尋ねられると、「できるだけ早く発見してもらおうこと」と答える。

孤立死は発見が遅れるほど、においなどで近所の人に不快な思いをさせる。部屋の片づけは業者に頼むにせよ、遺族、身元保証人、大家などが費用を負担しなければならぬ。とくに大家は、親族が見つからない場合に肩代わりしたり、周囲の住人が出ていって家賃収入が減ることもあり、ダメージが大きい。

## エンディングノート 書いてみる

遺品整理会社社長・吉田さんは「おひとりさまでもだいじょうぶノート。」を作って、希望者に無料で配布している。オリジナルのエンディングノートで、薄く、字も大きいので、面倒くささを感じることなく書ける。

「誰かと一緒に暮らしていても心が離れていることが多い時代、おひとりさまは悪いことではない。むしろ孤立ではなく『自立』したおひとりさまはカッコいい。そういう人は周囲とも共存していけるのでは」（吉田さん）